

平成30年6月1日発行 春燈/第73巻第6号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 June

6月号



主宰の句

安立公彦

遠ざかる軍靴のひびき花の下
(佐倉五句)

散るさくら佐倉聯隊跡寂と

百桜の百の目に逢ふ城址かな

武家屋敷幾代の春を耐へ来しや

城址公園出丸に春を惜しみけり



安住敦の句

寝るまへのひととき凭れる籐椅子かな

『歴日抄』昭和三十九年

柿の木坂のご自宅の縁側に籐椅子が置かれていたという。余程この籐椅子がお気に入りだったとみえ、籐椅子あり夕べは人を想ふべし、等籐椅子を詠んだ句は多い。夏の夜の寝る前のひととき縁側で星空を眺め、月を仰ぎ、時には雨音を聞きながら来し方を、ご家族のこと、様々な人との関りや、これからの春燈の事等、一日の心身の疲れをとる貴重なひとときであったのであろう。

赤羽陽子

安住敦の句

水中花綺麗に嘘をつきにけり

【午前午後】昭和四十四年

作りものである水中花が綺麗に嘘をついたという、まがいのものが嘘について美しく見せていることとお見通しの上でそれを許している。むしろそんな嘘ならつかせてみたい、つかれてみたいとさえ思われている様子だ。虚の物と実の自分の気持を静かに見詰め、水中花に対し写生だけで終わっていない。「上手に」でなく「綺麗に」に師ならではの表現の奥行を感じる。

大文字孝一

燈下集

○ 小泉三枝

雛あられ幸せ分くるごとこぼれ
鉢替への土の匂へる雨水かな
田の神の膝下を田螺たもとほる
鳥獣の絵巻抜け出す梅月夜
灯台に果てし国道鳥雲に

○ 平野加代子

チューリップに声かけひと日始まれり
ランドセルのきず誇らしく卒業す
げんげ田を抜けてもらひぬ山羊の乳
灌がれて拵ぐる笑まひ花御堂
春愁の色は何色コンペイトー

○ 田嶋洋子

雪解川早瀬の光飛び散れり
吉祥の雲の高さの春野かな
梅東風や入院鞆に話むる本

倫敦へモーニングコール春薔薇
婚の荷に積まれ来し雛飾りけり

○ 諸岡孝子



芽吹くものうす紫に雑木山
釣釜やおのれに甘き炉を平し

梅三分ほどの幸せ伏臉

四月馬鹿うべなふ子の歳己が歳

囃や夫の耕し三坪ほど

○ 菅澤陽子

如月やねんごろに磨る古墨の香
梅東風や赤毛の交じる神馬の子
水仙の薫りくくりて供華とせむ
先客に和してはづむや春炬燵
遠き日のむすび、漬け物山笑ふ

○ 白神知恵子

行儀よき幼き客や雛あられ
吉備入日種蒔く人の影絵めく
屈み込む少年に寄る残り鴨
金縷梅のもつれ気にしつ昼を臥す
春満月紅白饅頭裏戸より

○ 長谷川歌子

初音かな日曜の路地まだ醒めず
雪柳阿修羅の風となりにつけり
花散るや十指に余る夢かけら
卒業歌は老いの懐メロ声高し
五つ紋衣桁にさぼし桜鯛

○ 金山雅江

われ母の乳房も知らず忘れ雪
草餅や嫂の味母の味
親子とて師弟の大工芽吹きそむ
手の中の貝の雛をそつと吹く
灯ともせば亡き子雛の面輪かな

○ 太田佳代子

抽斗のビー玉行き来春やすみ
悔しさを子らは隠さず春夕焼
生れ変はるために夜通し亀鳴けり
一方は頷くばかり春の雨
靴に春泥固まつてゐる反抗期

○ 久保久子

するするとしがらみ解くや春シヨール
桜守一木ごとに声かけて
何もかも知りつくしてや山笑ふ
種芋のころがりぬたる三和土かな
この先も逡巡ありや蜚の道

○ 廖 運 藩

白沙岬灯台霞に浮かぶ立ち姿

鐘霞む皇民化教育起源之地 釜山

鐘霞む六氏師遺蹟惠濟宮 釜山

仙人の住まぬ土地柄薄霞

草霞む犁ひく牛の長尿

○ 久 米 憲 子

旅先の小さき春を摘みにけり

むづ痒き鼻持ち歩く木の芽時

囀の飛び込んで来る花頭窓

瞑りて聴く仏の声のあたたかし

永き日の水車ゆつくり回りけり

○ 小 倉 陶 女

地虫出づ君達はどう生きるかと

空耳の母の小言や彼岸入

うららかや耳こそばゆき風の私語

ぺちやぺちやとようしやべらはる春の波

川上も川下も花ぐもりかな

○ 荒 井 慈

春昼や大仏通りの印度人(鎌倉五句)

刑場跡の翁の句碑や鳥曇

山門の竜動き出す臙かな

春水を浴ぶる鳥の男振り

山笑ふ谷戸を揺るがす御題目

○ 佐 渡 谷 秀 一

亡き人にお休みと言ふ春の夜

遠き日へ笹舟流す彼岸かな

きのふけふあすも無口な田螺かな

決めごととはひとに任せり紫木蓮

独り見るあと幾たびの桜かな

○ 沼 田 桂 子

カーテンを引く目にふはと春景色

白き船かすかに進む春の沖

対岸のマンション映す春の潮

鳶高く鷗は低く鳥曇

半島をベールでつつむ春の雨

余言



安立公彦

鳥帰る秩父雁坂峠かな

松橋 利雄

一句の中に名詞、ことに地名を入れるのは、簡易なよう
で実際には難しい問題を抱えている。地名そのものの持つ
言葉の難易度、知名度、必要性ということが、その句を読
む人の理解を大きく左右する。

この句、「秩父雁坂峠」が、例えその地を知らない人に
とっても、何となく懐かしく感じさせてくれる。それは秩
父という周知の地名の故だ。「雁坂峠」を空高く北方に帰
る鳥の群れが感知されよう。表現の良く整った句だ。

亡き夫の誕生日けふ白魚汁

諸戸せつ子

普通に「亡き夫」とあり、「けふ」とあると、その後には
続く言葉は「夫の忌日」となるのが一般だ。しかしこの句

は忌日ではなく「誕生日」である。「亡き夫の誕生日けふ」
は爽やかだ。その中に「夫」への思いが、句を読む私たち
にも心地良く伝わってくる。「誕生日」は善い選択だ。

作者はいま白魚汁を拵えている。それは亡き夫の好物
だった。「誕生日けふ」が生きている。亡き夫君もさぞ喜
んでおられるだろう。尚、「白魚汁」は、しらを汁と読む。

うららかや鼻緒のゆるむ日和下駄

柴崎甲武信

「日和下駄」と聞くと、永井荷風の同名の小説を思い出
す。但し時代は今を遡る一〇三年前、大正四年の作。「東
京散策記」の副題が付いている。

この句の日和下駄は、天気の良い日に履く歯の低い下駄
を指す。この句を見ていると、「うらうらに照れる春日に
ひばりあり」という、万葉集に出てくる和歌を思い出す。
「鼻緒のゆるむ日和下駄」はまさに言い得ている。更に、
「うららかや」が、その中七下五を良く活かしている。春
のひと時、庭前を散歩する姿が浮かぶ。

うたかたのこのひとときの夕ざくら

小嶋 恵美

「うたかた」は「泡沫」、ほうまつとも読む。はかなく消
え易い意。「このひとときの夕ざくら」を形容するのにふ
さわしい。しかしこの句は個々の言葉の詮索ではない。

一句を通して唱していると、そこには暮れゆく夕ざくら

の姿が、スクリーンに映し出されるように広く深く感じられてくる。儚い気意さも感じられよう。この「夕さくら」は読み手の気意さを包み、印象深く花枝を広げる。「うたかたの」が良く効いている。

莖立や開きしままの去来抄

栗原 完爾

三月本部句会で特選に戴いた句。「去来抄」は向井去来の俳論書。俳人であれば一度は手にする書だ。去来は蕉門十哲の一人。凡兆とともに「猿蓑」を撰する。

「開きしままの去来抄」が善い。本部句会報にも書いたが、この句は「去来抄」であって初めて完結する。内容とともに言葉の座りが適切だ。「開きしままの」は、まさに「今」を表わす。「莖立」は莖が伸びて莖の立つこと。「去来抄」との隔たりが微妙なバランスを保っている。

吉備入日種蒔く人の影絵めく

白神知恵子

吉備は、備前、備中、備後、美作の古代国名。現在では備後を除いて岡山県となっている。この旧国名は、地域によつては、現在の県名より親しみを感ずる名もある。中で「信濃」などは殊にそういう思いがする。

暮れかねる春の日も、漸う日暮の頃となった。備後の山脈に入ろうとしている夕日。種蒔く農夫の影が入日を受けて、あたかも影絵めいて来た。何と伸びやかな平和なひと

時であろうか。それはこの国の全ての人の思いでもある。

仁清の写しの茶碗花明り

宮田 豊子

「仁清（にんせい）」は、江戸前期に活躍した京焼の巨匠手許の陶磁器辞典には、色絵技法の茶陶、御室焼を完成したとある。多彩な水指の絵柄図が付いている。

この句、作者は今、仁清の茶碗だろうか水指だろうか、それを見つつ粘土を手捻りしている。やがて焼き上った茶碗は、持つ手に和らかなぬくもりを与えてくれる。それは陶芸を為す人の一番の愉悅のひと時であろう。その思いを更に深めるのが、窓外に見る満開の花明りである。

彼岸会や母に手向くる絵らふそく

藤原 若菜

彼岸会は春分の日をお中日とする七日間の仏事。彼岸参りは秋の彼岸参りとともに欠かせない仏事である。故郷を遠く離れて過ごす人たちにとっては、春秋の何れかに参らねばと思いつつ、思いのみ過ぎゆく日でもある。

作者はこの日故郷にねむる母堂の墓参りに参じたのだ。墓前に手向ける線香とともに蠟燭を捧げる。その蠟燭は今日「絵蠟燭」。墓前に点る彩りがことに美しい。或いは母堂との思い出のある絵蠟燭だったのかも知れない。表現もよく整っている。如何にも彼岸会らしい句だ。

〈春燈賞受賞作家・特別作品30句〉

花の下

荒井ハルエ

母の手を離せずにをり入学児

「せんせい」と初めて呼ばれ花の下

春風やもしもしあのね糸電話

指折つて俳句詠む子や花の陰

採点のテスト飛び散る春疾風

ひとり身の子育論や花の冷

母逝くや寄り来る子らのあたたかし

遅刻の子ポッケより出す蜥蜴かな

夢語る少女一途や百合の花

汗の子の抱きつく鼓動あらし

通知表ひそと見る子や七月尽

臨海学校一日終へたる寝顔かな

声援に押され二十五メートル泳ぐ
読み聞かす『火垂るの墓』や終戦日
保護者より抗議の手紙つくつくし
運動会果てて教師の嗚れ声
爽やかに九九の暗唱揃ひけり
拗ねる子の背に語りかけ秋の暮
撫子やひとりになれば素直な子
面談の秋の灯ともす校舎かな
学級崩壊の夢より覚めてちちろ虫
子と遊ぶ花いちもんめ天高し
初雪に窓いつぱいの子供かな
校庭に立たされてをり雪だるま
見回りの長き廊下や寒の月
病みし子の遺せし細工雛壇に
途中より声掠れけり卒業歌
校門を出て振向かず卒業生
教へ子や初任給でと春シヨール
転生もやはり教師や花ふぶき

〈春燈賞受賞作家・特別作品30句〉

春日傘

永井恵子

パワーシヨベル首持ち上ぐる四日かな

タツパーにまだ残りゐる鬼の豆

辛夷の芽あまねく光受け止めん

二月や北斗七星中空に

しだれ梅夢二画集に収めたし

梅林や遠く去りゆく汽車の音

寒明や電話は妻の用ばかり

寒明や夫の居ぬ間の長電話

ステッキも杖も親しや草青む

のつそりと胴長くして恋の猫

春光をまとふや産み月近き人

下駄履きで探すや朝の露の臺

雛壇より一粒つまむ金平糖

姉に似る雛の鼻の少し欠け

たんぽぽや地べたに憩ふ牛五頭

女教師の産休に入るうらけし

ペダル一漕ぎ校門を出る卒業子

欧州へ行くといふ子や春休

大河ドラマの郷の訛や月おぼろ

三極の花や新燃岳また噴くも（霧島）

スイートピー若やぐ部屋となりけり

降灰や日除けにあらぬ春日傘

春愁や診察室に少女入る

蒼天を奪ひ合ふかに桜咲く

トーチカの残る脇径散る桜

人事異動野にありてこそ紫雲英なれ（転勤の長女三句）

転勤の朝に届く蕨かな

見納めの校庭桜夕映えす

額装にしたき蘇枋や祖父は亡し

園児らに囲まれゐるや甘茶仏

当月集

安立 公彦選



○ 持田 信子

沢水のかすかな音や蘆の角（小山田緑地）

くもり日の通草の花の雌雄かな

今日生くるいまの幸せ幣辛夷

蓬摘む指にみどりの香を深め

草餅や母に似てきし笑ひ皺

○ 平 沢 恵 子

少年にためらひの笑みさくら貝

春光や城の礎石に地図広げ（佐倉城址公園）

目借時大樹の洞のあかるさに

空堀の底に息衝く董かな

春灯白湯のまろみをわかち合ひ

○ 中 澤 弘

あどけなき売子の微笑フリージア

沈丁の匂ふ路地裏掲示板

ゆすら梅日は燦々と雨上がり

初空爆の地や忸怩たる花見酒

万愚節虚数の定義封印す

○ 坂 本 依 誌 子

春装や嫁ぐ知らせの京みやげ

桜もち右手を上に組む正座

先づ会ふは子安地藏のさくらかな

ひともとの十年桜散りゆけり

いもうとの生れしばかりや入園児

○ 佐 藤 ま さ 子

春光や今出航の旅客船

さくら咲く珈琲店の賑はへり

頬白やベンチ明るき午後の園

たんぼぼを手に握りしめ眠りし子

夜桜の溢るるやうに咲きにけり

春燈の句

安立 公彦選

文明は河の畔に水温む

東京 近藤 真啓

口下手は父親譲り春の鵞

水城の月見櫓や桜まじ

身の丈に点す春灯とこしなへ

童心もて曾孫の相手花明り

埼玉 長谷 仁子

市の森にあちこち据えし巢箱かな

椿落つ掃き寄せたるや燃ゆる如

苺一つ潰し離乳を始むるや

真砂女忌や安房にやさしき涅槃西風

神奈川 山下 健治

旧友と久闊を叙す花の昼

明治を語る銀杏大樹の芽吹かな (日比谷公園)

鳥曇杜に白亜の松本楼

彼岸前毛色のちがふ猫見かけ

兵庫 秋山 薫

墓碑裏にまはれば吹くや彼岸西風

天心に昼月確と花こぶし

長閑しや毗さがる石仏

ほつほつと山の灯や水温む

風光る出雲土産の金平糖

躑口に幼の靴や風光る

潮風を受けて椿の華やげる

風光る車窓に向かひ正坐の子

女子高の野点実習梅祭

熊笹を辿る岨道花木五倍子

幼子に続く中腰土筆生ふ

時流るるいのちの灯り花灯り

質屋坂下り来る人の春日傘

鐘の音の正午を告ぐる花の中

母の家は千住の北や竹の秋

東京 池上 昌子

東京 佐俣まさお

東京 鈴木としお

